

講 話



鳥 學 之 歴 史 (上)

和 田 千 藏

鳥類に關する研究は太古より行はれたるものなれども眞の學術的に研究せらるゝに至りしは實に近來のこゝにして稍秩序的に研究せらるゝに至りしは疑もなく十八世紀以後のこゝとす、太古は何れの國に於ても陸上動物は多少人の注意を惹き易く從て之を研究せる人も幾分存在せり、されど飛翔動物殊に廣漠無邊の天空を己が意の儘に飛翔する鳥類にありては他動物に比し一層の注意強要したれども、智識の幼稚なりし當初の時代には之を蒐集する者だに望むべからざるや論なし、古代の文明國に於ても鳥は永き間畫家の手によりて誤れる描き方を繼續せられたるのみにて之を組織的には研究せられざりき。

抑も鳥學の起元も稱し得べき時代は草昧のこゝ故考證するに由なしと雖も、往古埃及ブーラク博物館 (Boulak Museum) に保存せられたるガテフを描ける壁畫の破片あるを見れば當時既に鳥類の研究ありしこゝ明かにして以て斯學の嚆矢となすべし、而して此の壁畫は有名なる埃及學者の説によればメードムの墓地 (Maydoom Tomb) より採出されたるものにして耶蘇紀元凡そ三千年以前の古畫と稱せられ、描かれたる六羽の水禽は形態及び色彩等に就きては幼稚ながらも頗る丹誠を凝せるものにして此の内四羽は相違なく直ちに今日の *Anser albifrons* (眞雁) 及び *Anser*

myioides の一種に屬せしむべく残りの二羽も専門家によりて深く調査を積みたらんには必ずや或部類に屬せしめ得べし云ふ其の後年に至り種々なる鳥類を埃及の畫家竝に彫刻家が材料として製作せるもの殆ど無數に出現するに至れり、又アシシリヤ人 (Assyrian) の或記念碑は大概遙か後年に出來たるものなれども矢張鳥類を材料に供したるものゝ如し、而ながら歐洲の有史以前に使用せし石 (Stones) 骨 (Bones) 象牙 (Ivories) 等には鳥の像を有するもの曾て發見せられざりき、以下各國に於て鳥類を研究せる徑路の一端を説述せむとす。

第一項 外國に於ける鳥學の歴史概要

鳥類の研究は既に太古より行はれたるものなるべし雖も多くは其の立場を宗教上或は實用上に置きたるが故に全然非科學的部分を多く包含せり謂ひ得べし、而して科學的に研究したる最初の國を案するに東洋なりとす、即ち支那にては今を去る三千年の昔爾雅 (周公の撰する所傳へらる) なる一書出で其の釋鳥篇 (第十七卷) にて禽に關する記載をなせり、其の一節に曰く禽の定義を下すに「二足而羽謂之禽」四足而毛謂之獸とみなせり、之を以て推測するに當時既に禽類に對し羽族の觀念を有せしことを推察し得べし、其の後泰西に於て斯學の胚胎を見るに至りしは實に紀元前四世紀のことにしてアリストートル (Aristotle, B.C. 384—323) 氏之が先鞭者たりとす、彼は當地既に一百七十種以上の鳥類に關する記載をなせり、此の研究は往々にして矛盾せる觀察をなせるためハチ、蝙蝠等の如き飛翔動物をも加へたり、されば其の或種類に至りては後進者の疑問となり之が解決には約三百年間を消費し尙不可能の悲に終はれり云ふ、最近に於ける斯學の大家瑞典國サンデバル (Sundevall, 1831—) 教授に於ても該研究に没頭し一千八百六十三年には凡そ二十種の鳥類を遺憾ながら不明のものとして斷念せざるを得ざりき、彼の研究は後年に至りがザ (Gaz) 氏等の手によりて羅國譯書となり一千五百三年ヴェニス (Venice) より出版せられたりしが次でスカリガー (Scaliger) 氏の手によりて引續き別版を出だし其の後不完全なりとは雖も二種の英譯書さへ出版せられたり。

アリストートル氏より遙後年にブリニー (Pliny, A.D. 23—79) 氏は該博なる自然の研究を三十七冊の *Historia Naturalis* に記載し其第十卷には鳥類に關する事項を記載せり、彼の著書の殆んど大部分は彼の先進者よりの承繼にして其報告を自由に利用し而し

て全體に訂正を行ひたりとは云ひ難し、此等の著者は何れも極めて不明瞭なる部類以外には鳥を分類せざりき。

アリストートル氏は次の八種の部類を認めたるが如し、

- 一' Gansonyches.
- 二' Scoliocephaga.
- 三' Acanthophaga.
- 四' Scapophaga.
- 五' Peristeroide.
- 六' Schizopoda.
- 七' Steganopodia
- 八' Barea.

ブリニー氏は脚の特徴を大略の基礎として三部類に分け命名したりき、即ち一' Hooked talons (タカの如きもの) 二' Round long claws (鵝鵝類の如きもの) 三' Broad flat whole footed (水禽の特徴となるもの)等なるものはヒレモン・ランド (Philemon Holland) 氏の説にして氏は一千六百〇一年に珍奇にして縮少せる而も忠實なるブリニーの英譯書を出版せり。

二世紀に至りエーリアン (Aelian, A. D. 119 死) 氏出で諸種の動物に就き多様な觀察をなせしものはギリシヤに於て編輯せり彼の研究は科學的辨別に缺點ありし雖も稍多數の鳥類に就きて記載せるは吾人の敬服する所なり、されど其内容の或物は今日の研究より見て極めて無意味のものもあり又一面に於ては頗る興味ある觀察をもなせり。マグナス (A. Magnus, 1200—1280) 氏は獨逸の博物學者にして一千四百七十八年 De Animalibus et Albertus Magnus (Groot) を稱する二十六卷の書は出版せられたり、而して該書の多くはアリストートル氏の書に基きたるものにして多くの記述は文字通りに繰返され或は全然無意識的に寫記せる部分もあり、又往々アヴィシンナ (Avisenna) 氏及び其の他餘り有名ならざる著作より引用したれども、夫等に添加せる報告は稍價值あるものゝ如し、同書の第二十三卷は De Avibus にして數多の鳥名は始めて出現せり、而して其の多くは何れの種に屬すべきものなるや頗る困難なりき。一千八百四十五年には Ortus sanitatis の第一卷は現はれ其の評判宜しかりしこゝは多くの版を重ねたる事

實によりて明かなり。キウバ (Cuba) 氏の説によれば東部歐洲、西部亞細亞、埃及を旅行せる或貴族の蒐集せるものゝ研究より作成せるものなり云ふ、其の貴族は恐らくブライデンバッハ (Braidenbach) 氏にして其の旅行記は一千八百四十六年にメンツ (Mentz) に於て發行せられたり、其の實際は醫學的調査にして動物學的研究はマグナス氏の縮寫物にして中に或はセビーユ (Seville) 氏の Isidorus 及び Physiognus の拔萃物をも混在せり、此の三卷は鳥類を専門に記載したれども中にはコウモリ、ハチ其の他の飛翔動物をも包含せしめたり、而し鳥類の形態を最初の印刷物として紹介したるものなるが故に其の圖解の多くは粗雑なる彩色の木版にして種類の詳細なる説明を誤りたりと雖も、鳥の形狀を最初に木版にせる點は大に注目すべき價值を有す。

ウィリアムターナー (William Turner, 1520—1568) 氏は英國 Northampton の人にして死刑を避けて外國に逃走せし其の間 Cologne に於て一千五百四十四年にアリストートル及びプリニー氏によりて擧げられたる鳥に最初の説明を試みたり、其は近代科學者と同様な精神によりてせられたるものにして其の年及び其れ以後にロングリー (Longolius) 氏の Dialogus de Avibus 出版せられ、而して一千五百七十年にはカイウス (Caius) 氏はロンドンにて彼の研究論文を De rariis animalium et que stirpium historia として發表せり、是は一小論文なれども鳥類學に關する事項は比較的豊富なり、而して以上述べたる三氏の論文は今日に於ても鳥類研究者に趣味と實益とを與ふること甚大なり、斯かる間に其の方面の研究は一千五百五十五年チウリッヒ (Zurich) に於ける有名なるコンラードゲズネル (C. Gesner, 1516—1565) 氏の Historia Animalium なる書の第三卷の出版により、又同年パリに於けるベロン (Belon, 1517—) 氏の Histoire de la nature des Oiseaux の出版により大なる刺激を受けるに至れり、ゲズネル氏は夫れ以後と雖も匹敵し得ざる彼の主題に關する多量の説明を發表せり、彼の記載せし時代より考ふれば彼の觀察は多くの點に於て優れたりしものに相違なし、然しながら彼の著書中にては組織的研究と稱し得べきものは極めて少し、エーリアン氏以後の殆んど凡ての先進者の如く彼は當時學者間に餘り重視せられざりしがアルハベット式の配列を採用せり、而して鳥の各種類を最も代表するものを最初に置き其の下に其れに類似せるものを集むることと或程度迄分類の主義となせり、ベロン氏は同時代の者よりも讀書せること少なけれども決して淺薄なる學者にあらずして疑もなく鳥類に關する實際の知識に富み其の外的構造並に内的構造に關する知識を有し鳥と

人との骨格の比較を試みたる最初の人なり、故に佛語にて書かれたる彼の書籍は多くは獨創的部分を包含し加之ベロン氏は彼の知れる鳥類を一定の方式に従ひて分類をなせり、此の業績は粗雑なりしことは勿論なれども彼の後繼者は好んで其れに従ひて自説を立つべき根柢を作り、而して尙今日に至る迄其の影響の痕跡は諸書に於て認めらる、ベロン氏の著述はゲズネル氏と同様に木版圖解を有し其の多くは彼の正確と細心を示せるは大に尊敬すべき點なり。其後フレスシア人 (Frisian) コイター (Coiter, 1534—1600) 氏は一千五百七十三年及び一千五百七十五年にニウレンベルヒ (Nuremberg) に於て二大論文を發表せり、其の一は一般鳥類内部構造に關するものにして内容は信頼に價するものなり、他の一は或鳥類の型を其の骨格學 (Osteology) 並に筋肉學 (Myology) に頗る詳細に記述せられ且細心に描かれたる挿畫を有せるものなり、前者は *Eternarum et eternarum principium humani corporis Tabulae* 後者は最も價值あるものにして *Lectiones tabularum illiopi de partibus Similiarum humani corporis* なる書中に一部分記載せられたり、而して兩書の範圍は醫學的なるがため單なる自然科學者よりは全然閑却せらるゝ。雖もコイター氏は *De differentia Avium* の表を紹介して彼の知れる鳥類に關して粗雑なる分類の手引を與へたり、而して是こそ注目に價する斯種の企中最初のものなり。此等の人々同時代にアルドロバンダス (Aldrovandus, 1524—1605) 氏あり、氏は伊太利ボルニー (Bolognese) の人にして *Historia Naturalium* と稱する十六卷の著述をなせり、一千六百〇五年に於ける彼の死後に至りて多くは出版せられたれども鳥類に關する三卷の著は一千五百九十九年より一千六百〇三年の間に其の一を出版せり、同書はゲズネル氏の記事を屢引用し殊に *Ornithologus* に於て然り。す彼はベロン氏の分類法を變化せしめ一層詳細なる説明をなせり。雖も或數個所の點に於ては却て退步せる傾向を有せり、尙同氏の著書には不完全ながらも銅版の圖を用ひ好評なりしがため數版を重ねたり。カスパーシウウレンクフエルト (Caspar Schwenckfeld) 氏の醫學的研究は極めて價值あるものにして一千六百〇三年リীগニッツ (Liegnitz) にて *Theatrum trophaeum Silesiae* なる表題の下に其の第四卷を出版せり、吾人は *Fauna* なる名目を以て知れる著作の嚆矢とす、彼は先進者の作品に通用したることは一百卷以上の目錄よく之を證明せり、彼の記載せる多くの性質の系統立つるに足る程度の正確さの下に記載せられたり、而して彼等に對する觀察は興味あるものなれども彼は分類的研究には智識を有せざりしが故に彼の時代の誤謬を訂正し

得ざりき、是がために前述の著作は *Orbis Veteribus notus* に屬する鳥以外のものを殆んど研究し得ざりき、されど十六世紀の地理的探檢の成效と共に多くの未知の種類の動物は約百年以後に至りて世に知らるゝに至れり、茲に於ては單にボンテウス (*Bontius*) クラシス (*Clusius*) ヘルナンデツツ (*Hernandez*) マルクグラブ (*Marcgrave*) ニーレンベルヒ (*Nieremberg*) ピソ (*Piso*) 等の名を示したるに止む、彼等の作品は兩印度地方の生物を記載せしものなれどもオリナ (*Olinia*) ウオルム (*Worm*) の作品と合せて顯著な效果を作り出したり、彼は科學的鳥類學の基礎と見做さるべきものに迄至らしめたるものなり、此の基礎はフランセスウエルグビー (*Francis Willughby, 1635—1672*) 氏 (*ジョン・レイ John Ray, 1628—1705*) 氏の協力によりて鞏固となり、兩者は常に合同して研究し又蒐集旅行等をもなせり、ウエルグビー氏は不幸にして研究半途に死したれどもレイ氏は生前の約束を果しレイ氏の名目にて之を世に發表せり、加之レイ氏は自己研究の結果を以て一千六百七十六年羅甸語の *Ornithologia* を出版し後一千六百七十八年には訂正を加へて出版せり、該書によれば鳥は大體陸禽水禽の二大部類に區分せらる、前者は曲嘴曲足を有するもの、伸直なる嘴瓜を有するもの、二部に分類せられ、又後者は水邊に屢集合するもの、水面を游泳するものに分類し其の各部門は又多くの小部門に細別し、其の全體には項目を與へ殆んど凡ての諸書に觀察せし殆んど凡ての鳥類を夫々適當なる位置に誤なく編入し得る樣便宜を與へたり、レイ氏の鳥類學に對する興味は一千六百九十四年 *Synopsis methodica Avium* となりて現はれたり、其は其を依托されたる本屋の間違にて一千七百十三年に至る間デルハム (*Derham*) 氏の發表する迄其を出版せざりき、レイ氏の死後二年にして瑞典國にリンネー (*Linnaeus, 1707—1778*) 氏即ち博物學の第一改革者は生れ、一千七百三十五年には有名なる *Systema Naturae* の第一版を著し再版は著者監修の下に一千七百四十年、一千七百四十八年、一千七百五十八年及び一千七百六十六年に發行せり、同書により從來自然界に對する誤れる觀察は訂正せられ自然分類學の基礎は築かれたり、而して鳥類の分類は主としてレイ氏の方法を採用し夫れに改良を加へたるものは極めて稀なりき、バーレル (*Barthol*) 氏は一千七百四十五年にベルギナム (*Perpignan*) にて *Ornithologiae specimen nomen* を出版し、一千七百五十二年にメーリング (*Mahring*) 氏はオーリツチ (*Aurich*) にて其れより尙小なる *Avium Genera* を著述せり、是等兩著は今日頗る珍貴にしてリンネー氏の方法に基きて記載せり。クライン (*Klein*) 氏は彼等に決して劣らざる分

類學者にして一千七百五十年に *Historia Avium Prodomus* をリウヰック (Lunbeck) にて一千七百五十九年に *Stemmata Avium* をライプチヒ (Leipzig) にて出版し天下の歡迎を博したり、而して後の書の特徴も稱し得べき點は多くの鳥の頭と脚とを四十枚の圖版に示したるにあり。

リンネー氏大著の増版は博物學を進歩せしむるは勿論且言語上にも緻密なる注意を向けたるの實例は科學的鳥類學の著者に甚大なる影響を及ぼしたれども、一方に於ては他の多くの著者は其れと異なる方法を取りて鳥類の研究を進めたり、其の異なる方法は主として眼に訴へて判斷し得る範圍に於て鳥の繪を描きて説明するものなりき (今日の所謂圖說) マルクカテスビー (Mark Catesby) 氏は一千七百三十一年より一千七百四十三年迄の間にロンドンに於て *Natural History of Carolina* を著述せり、同書は二卷に互る大版物にして其の内容たるや植民地フロリダ (Florida) バハマス (Bahamas) に於ける鳥類の鮮明なる色彩圖を挿入し現今頗る賞讃せらるゝ多數の高價なる大書の先驅なり。一千七百三十八年より一千七百四十年迄の間にエリザル、アルビン (Eleazar Albin) 氏は *Natural History of Birds* を著述せり、該書は三卷より成り前書より一層の大冊にして四つ折判なりき、されど彼は鳥類學を輕視したる傾向ありしが如し、而して彼の色彩圖版はカテスビー氏の其れに比しては遜色あり、鳥の繪に關する點又學者としての點に於て前兩者に優さるものはジョージ、フエドワード (George Edward) 氏なりとす、氏は一千七百四十三年にアルビンと同様な表題の下に活版印刷を有する鳥の畫集を出版せり、同書は *Gleaning in Natural History* なる表題にて引續き出版せられ一千七百六十年に至り其の六部門即ち四卷に達したる時遂に完了せり、其の挿畫は殆んど常に任意に描かれたるものなり。エドワード氏の作品完成と同年に一層有名な學者は佛國に現はれたり (ベロン時代以來佛國は斯學に貢獻する所少かりしが)、即ちマサリン、ジャツケス、ブリッスソン (Mathurin Jacques Brisson, 1723-1806) 氏にして其の著 *Ornithologie* は同時代に於ける斯學の發展に貢獻するこゝ甚大なるものにして六卷に互る大冊なり、而して其の特徴とする所は稀有の記述的鳥學者たるこゝを保つ今日にても尙彼に及ぶ者なかるべし、氏の分類はリンネー氏のものよりも確に優秀なりしが故に後代鳥學者の引用する所頗る多かりき。サラーネ (Salerne) 氏は一千七百六十七年バリーに於て *L'histoire naturelle éclaircie dans une des ses Parties Principales, L'Ornitho-*

Lorie を出版したれどもレイ氏の Synopsis に多少訂正を加へたるものなり。オーベントン (D. Audenton) 氏はバッフォン (Buffon) 氏の刺戟を受け Palanches En luminez d'histoire naturelle を出版し、該書には一百八枚の彩色圖版を挿入し其の大部分は鳥類なり、バッフォン氏は一千七百四十九年に Historia Naturelle generale et Particuliere の出版に着手しモンベリエール (Mont Belieu) 氏の助力により一千七百七十年に完成出版せり、此の第一巻は鳥類に關する記載にしてアリストートル氏以來眞文學的内容を含める最初の書なるを以て宗教上大に信憑せられたり、又彼は動物の地理的分布を最初に研究し一方不完全ながらもリンネー氏の種不變説に反對し自然科學者の範圍を擴張せり。ラザム (John Latham) 氏は一千七百八十一年に General Synopsis of Birds を書きたれども學名を採用せざりき、彼は主として鳥學の發達史に無上の興味を抱き専心之が研究に従事せり、彼の Synopsis は一千七百八十五年に完成し一千七百八十七年乃至一千八百〇二年に二度増訂し、更に一千七百九十年には Index Ornithologiques なる表題の下に右書の拔萃物出版せられ同書には學名を採用して各種を説明せり、一千八百二十一年乃至一千八百二十八年の間に彼はウインチェスター (Winchester) にて十一卷の彼の原本を擴大せる A General History of Birds なるものを出版したれども彼の編纂者としての缺點は年々共に大なり其の結果面白からざるの不幸なれり。マウデテ (Maudslayi) 氏は Encyclopedie Methodique の中なる鳥學を分擔し一千七百八十四年に完成せり、一千七百九十年該書の改版に際しボンナトレー (Bonnaire) 氏は此の鳥學を分擔し二百三十頁を達稿せし時恰も佛國革命起りて死せるを遺憾す。ヴィロー (Villot) 氏はボンナトレー氏の遺業を繼ぎ Tablern encyclopedique et methodique des trois regnes de la Nature なる表題にて出版し、此の内鳥學は四乃至五卷に跨り一千八百二十三年に完成せり、而して此の舊版にてはマウデテ氏はアルハベット順に配列せしが新版にてはオーベントン氏の論義に修正を加へたれども其の業績は極端に淺薄にして取るに足らざりき。概して當時代の作品は大なる價值を有するもの少く中にはペンナント (Pennant) 氏及び其の他の小研究者出で、次でミュラー (Müller) ボツデルト (Boddert) スコポリ (Scopoli) ソンネラート (Sonnerat) グメリン (Gmelin) 等の編纂者出で、從來の研究を整理せり、此の間コイター氏以來內的構造の研究なかりしが發生學の基礎は偉大なるハルビー (Harvey) 氏により難の發達研究より決定せられ、一千六百六十二年乃至一千六百六十九年の間にパーラルト (Perroult)

氏はバリに於てバーネー (Du Verney) 氏は多種の鳥類に關する細究の八報告を出版せり、此の物は一千七百二十年英國に於て『The Natural History of Animals』として發行せらるゝに至れり、此等の解剖學者の死後他に八報告書も同種類を説明せる叢書現はれたるが故に此等二種のを合せて一千七百三十三年及び一千七百七十三年に佛國科學協會の『Mémoires』中に發表せり。ゲラードブラッーシス (Gerard Blasius) 氏は一千六百八十一年アムステルダムに於て『Anatomie Animalium』を出版し彼の發見したる有ゆる動物の細説を試みたる結果は内容に含まれ其の第二卷は『Volatilia』の研究にて三分の二は『De oocet pulis』の研究なり。

以上の如くリンネー氏以來十八世紀の末葉に至る迄諸學者出て研究を積みたれども其の業績は多く分類の方面にして互に相違せる方法を探りたる結果今日尙人を迷はすが如き記録を残したり、されど他の方面に於ては英國のハンター (John Hunter, 1733—1793) 氏及び佛國のヴィック、ド、アヅール (Vicq d'Azyl, 1748—1794) 氏は鳥の骨骼と筋肉組織に關して重大なる研究をなせり、獨逸のカスパー、フリデリツヒ、ウオルフ (Caspar Friedrich Wolff) 氏は一千七百六十四年に雛の發育問題に注意を向け近代發生學の大基礎を作れり。解剖學は有名なるキウヴェー派 (Cuvierian school) のキウヴェー (G. Cuvier, 1769—1819) 氏及び多くの弟子等によりて大に開拓せられ其の後彼等は分類を企てたれども現今一般に採用せらるゝ方式は認められず。斯して鳥學を研究する者漸く多きを加へ十九世紀の初年には鳥類の形狀及び分類の智識は非常なる勢力を以て駁々として進歩し、一千七百九十五年より一千八百〇四年には獨逸のナウマン (J. A. Naumann, 1744—1826) 氏は『History of the Birds of North Germany』を出版し、一千八百三十八年には米國のオーデュボン (J. G. Audubon, 1780—1851) 氏は自然に對する天才的才能を以て同國に於ける斯學の開拓を企て、メイン (Maine) よりルイジアナ (Louisiana) に至る東部諸州テキサス (Texas) フロリダ (Florida) カナダ (Canada) ラブラダー (Labrador) の諸洲及び當時最も未開地たりしミズリー河 (Missouri River) イエローストン河 (Yellowstone River) の流域地方を探検し其の材料を以て『Birds of America』の大著述をなせり、同書は五卷より成り自然大に着色せる精巧無比の圖版四百四十八枚を藏し一千六十五種の鳥類を舉げ極めて後世を裨益せり、尙氏は現今諸文明國に於て注目する鳥類保護に關する基礎を作りたる人にして吾人の深く敬意を表すべき篤學者なり。獨逸のティーネマン (Thienemann, 1793—1853) 氏は北部歐洲及びアイスランド (Iceland) を探検し歸りて一千八百四

十五年より一千八百五十三年に互り History of the Reproduction of Divers Species of Birds を出版し、該書は一百枚の着色圖版を藏し頗る價值あるものなり。其の他英國のグレイ (J. E. Gray, 1800—) グールド (J. Gould, 1804—) ウイルソン (J. Wilson, 1795—1856) スクレター (Seleter, 1829—) 等の篤學者出て一般鳥學の内容を一層豊富ならしめ、一方英國のオウエン (H. Owen, 1804—) 米國のマーシ (D. Marsh, 1806—1853) 氏等の化石學者出て、化石學に貢獻し、又バーカー (W. K. Parker) 教授は發生學にニウトン (A. Newton) 教授ウォーレンス (Wallace, 1823—1913) 氏等及び其の他の人々は分布に、英國のハックスレー教授 (Huxley, 1825—1895) は科學的分類に大貢獻する所あり。

又十九世紀の末葉には從來研究せる事項を整理せんとして諸學者は專心斯學研究に従事したる結果頗る完全なる著作物のみ現はれて今日に及べるものなり、即ちシーボーム (H. Seeborn) 氏は一千八百九十年ロンドンにて Classification of Birds シャープ (R. B. Sharpe) 氏は一千八百九十一年ブタペスト (Budapest) に於て A Review of Attempts to Classify Birds マイバート (G. Mayr) 氏は一千八百九十二年ロンドンにて The Elements of Ornithology ニウトン氏は一千八百九十三年より一千八百九十六年に互りロンドンにて鳥類に關する術語辭典即ち A Dictionary of Birds を出版し現今鳥學者の指針をなせり。又一千八百九十八年にはベツダス (F. E. Beddard) 氏の Structure and Classification of Birds をロンドンにて出版しイバンス (A. H. Evans) 氏は一千八百九十九年ロンドンにて Birds (Cambridge Natural History, Vol. IX) 即ちケンブリッチ博物叢書の第九編を出版し、鳥類の各科に互りて其の特徴生態等を正確に記載せるが故に鳥類研究者の好指針となり、大英博物館は一千八百九十五年に互りて Catalogue of the Birds in the British Museum, 27 Vols. なる二十七卷より成る大書を出版し出版當時迄の世界鳥類各種の記載を網羅せるが故に鳥類分類學に貢獻すること頗る大なり。其の他十九世紀の末葉に至りハンスガドウ (Hans Gadow) 氏は現今採用する分類方式を定めたり。更に二十世紀の御代に至りノルトン (Knowlton) 氏は一千九百〇九年ニウヨークに於て Birds of the World をアメリカ博物叢書中の一冊として編纂し、其の他各國に於て多くの鳥學者は競ふて綿密なる注意の下に諸種の調査を夫々専門的に研究しつゝあるが故に斯學研究の發展に長足の進歩を來す、分類及び生態は勿論應用的方面に至る迄一として此の區域に達せざるものなし、又政府は種々な

る行政機關施設の下に鳥類の保護増殖を企圖し、一方民間に於ても篤學の士出て個人の研究所及び鳥學會等を組織して細究しつつあるの機運に向ひたるは實に喜ぶべき現象なりとす。

要之泰西に於ける鳥學研究の發達は以上略説せし如く其の起元は古代に萌出したるものなりと雖も、其漸く隆盛となりたるは疑もなく近來のこころとす。されば未だ深く調査研究せられざる事項も多かるべく足跡の至らざる地も多きの感あり。

我國歐米の文運に遅るゝこころ尠からずと雖も今後之が研究に従事する者多からんか、土地の自然的狀況よく鳥類の研究に適するが故に先人未發の事項は踵を次で起るべく、却て歐米諸國の學者をして其進運を羨望せしむるこころ決して難きにあらずとす。

(未完)